

ジェイムズ・ステュアートとデヴィッド・ヒューム

古谷 豊（東北大学）

18世紀後半のスコットランドはその小さな社会から数多の学者・知識人を輩出し、経済学の領域でもヒューム（1711-1776）、ステュアート（1713-1780）、スミス（1723-1790）と三名の巨人が同世代にひしめいていた。同じ時代・社会を共有した彼らの人間関係並びに相互交流の実態は経済学が個別科学として作り上げられてきた過程を辿るうえでも重要な課題であり、多くの研究が積み重ねられてきた。しかし詳しく見ていくと、ヒュームやスミスと同時代人との交流については実に詳細に明らかにされてきたものの、ステュアートの同時代知識人とのつながりについては、ポツカリと不自然な空白になっている。ステュアートとヒュームとのつながりはその最たる例であろう。

ステュアートとヒュームの間にはそもそも注目を要するほどの交流はなかったのではないかと判断するのはたやすい。ヒュームについては繰り返し詳細な伝記が書かれてきており、J. H. Burton [1846]、E. C. Mossner [1980]、R. Graham [2004]のいずれを見ても、ヒュームとステュアートとの関わりは皆無である。ヒュームの書いた書簡は600通以上残されているが、そのうちステュアートにあてられたものは一通も存在しない。そもそも、二人とも同世代のスコットランド人であると言ったところで、ステュアートは都合22年間大陸に滞在し、ヒュームもロンドンやパリと、スコットランドを留守にすることが多かったのではないかと。交流がなかったとしても一向に不自然ではない。

しかしながらヒュームの「もっとも古い親友」であった William Mure は、その実、ステュアートが終生親しくしていたステュアートのいとこである。またヒュームは有名な Poker Club の有力メンバーであったが、ステュアートもまたそのメンバーになっている。これらの事実からは、両者の間に交流がないというほうがむしろ不自然に思われる。ステュアートは、ヒュームやスミスとは対照的な経済理論を形成しており、ヒュームとステュアートの間の交流の有無は18世紀後半の経済学の歴史を辿るうえでも決して些細な問題ではない。

事実は、この二人には親密な交流があった。我々がスコットランド啓蒙期の記録を読む場合に注意しなければならないのは、当時の党派的な対立心の激しさ並びに1745年のジャコバイトの乱のインパクトを考慮に入れることである。ステュアートはジャコバイトの乱に深く関わった極めて危険な要注意人物であり、彼との交流を意識的に避けたり隠したりする者も多かった。ジャコバイトへの共感を疑われて出世が頓挫し、手紙も開封され Postmaster が内容に目を光らせているという時代状況であった。ヒュームがステュアートとの手紙のやり

とりをできるだけ避けた最大の理由もここにあったのではないか。

ステュアートとヒュームを最初に取り上げたのは Skinner であった。Skinner は Skinner [1998], [2006] でこの二人の間には親密な交流があり、また彼らの経済理論にも（その違いにもかかわらず）様々な共通性が見いだせると指摘した。これは極めて重要な論点であり、本報告はより広範に草稿を掘り起こすことで、ステュアートとヒュームとの間の交流の全貌を描き出そうとするものである。

すなわち本報告では、1. ステュアートとヒュームは生涯にわたって交友関係を持っていたこと、さらに2. ヒュームはステュアート本人ばかりでなくステュアートの親族とも広く深く交流を持っており、二人はいわば家族ぐるみのつきあいであったこと、を明らかにする。

第1節 1711年・ヒューム誕生

ヒュームとステュアートとのつながりはヒュームの生前にさかのぼる。というのも、ヒューム家とステュアート家は隣同士だったからだ。ヒュームの育った Ninewells の家のすぐ前には Whiteadder 川が流れるが、その向こうに見えるのが Stuart's Law という名の耕地で、これはステュアートの又従兄弟にあたる Allanbank のステュアート家の領地である。

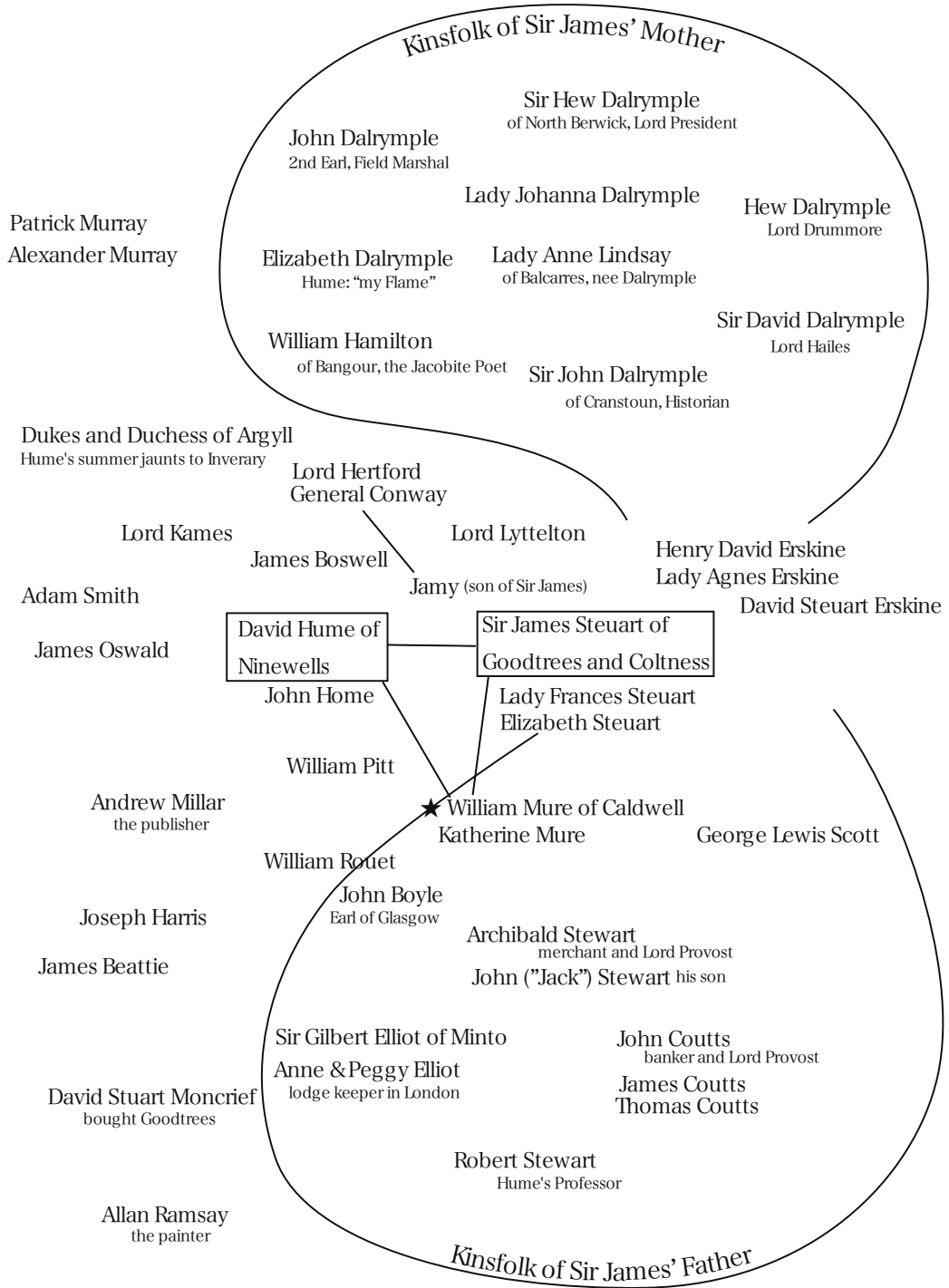
又従兄弟の家にすぎない、というなかれ。当時のスコットランドでは一族は内部対立する場合もあるが、そうでない場合は一勢力として結びつきを保って政治的・社会的力の伸張を図った。ステュアート家の場合がそうで、ステュアートの父方の一族も、母方の一族も、ともに結束して1689年以降の名誉革命体制のなかで権力の中核を担ってきた名門勢力だった。Allanbank 家はステュアートの父方の、Allanton-Coltness-Goodtrees 一族の分家で、Allanbank 所領内の集落に本家の名前をとって Allanton としたことにその結びつきが見て取れる。

ヒュームが親交を結んだ Archibald Stewart、John Stewart、John Coutts とその息子たち、さらには Gilbert Elliot もこの家の一員である。ヒュームもステュアートもともに生涯にわたってこの家族と親しく付き合っていく。ヒュームがロンドンではいつも Gilbert の妹達の宿に泊まっていたのは有名な話である。

第2節 1727年・ヒューム16歳、ステュアート14歳

ヒュームの少年・青年期に関する資料は乏しいが、エジンバラ大学でのヒュームが、おそらくは1724年から翌年にかけて Robert Stewart 教授に学んだことは分かっている。Robert はステュアートの大叔父で後にもヒュームと共にステュアートの妹の家を訪れたりしている。彼はまたニュートン主義者であり Colin MacLaurin がステュアート兄弟を教えたのも彼のつながりが関係したと

FIGURE 1: THE HUME-STEUART CONNECTION



推測される。

大学を出て、表向き法律家になるため勉強していた時期のヒュームについては、ステュアートの大叔母の家（母方）に食事に招かれた時の逸話が残っている。これは一回きりのことではなかったのだろう、ヒュームはこの家族（ステュアートのいとこの家族）と後々まで親密に付き合っている。Mossner はヒュームが'My Flame'と呼んだ Betty Dalrymple をこの家族の Betty と推定しているが、彼女もステュアートのいとこに他ならない。

ヒュームはなぜステュアートの大叔母の家へ出入りしていたのだろうか。おそらくは Henry Home と同じような事情であったのだろう。将来法律職を目指す優秀な青年として、ヒュームにステュアートの母方の一族が目をかけていたということではないだろうか。この母方の一族は当時スコットランドの司法界で最大の権門を誇っていた。また、資料には残されていないものの、当時同様に将来法律職での活躍を期待されていたステュアートが、こういった場でヒュームと同席していた可能性は充分ある。

ヒュームとステュアートの母方一族との広汎な交流は図に示した通りである。

第3節 1740年、ヒューム29歳、ステュアート27歳

さらに重要な展開は、ステュアートのいとこ William Mure とヒュームの生涯にわたる交友の始まりである。1740年には二人がロンドン近辺で親しく一緒に過ごしている様子が手紙に残されている。また、後にヒュームの人生に登場する William Rouet は Mure のいとこである。

以上のように見てくると、ヒュームがステュアート家の同世代達 (Mure, Gil. Elliot, Wil. Rouet, Lord Glasgow, John Stuart, G. L. Scott, David Dalrymple, etc.) と手に手を取り合って生きていき時代を作っていた構図が浮かび上がってくるであろう。

第4節 1745年、ヒューム34歳、ステュアート32歳

以下、要点のみ列挙していく。1744年ヒュームのエジンバラ大学教授へのプロモートでは、エジンバラ市長であった John Coutts と Archibald Stuart が直接関与する。Archibald は、ヒュームとステュアートが当時すでに知り合いであった可能性を示す鍵となる人物である。

1745年、ハノーヴァー王朝の転覆を謀るジャコバイトの乱が起きる。Archibald はロンドンに連行され、ステュアートは11月下旬にスコットランドを脱出、以降17年間大陸で亡命生活を送ることになる。

第5節 1752年、ヒューム41歳、ステュアート39歳

ヒュームはこの年 Advocates Library の Keeper になる。この時期ヒュームはステュアートの Goodtrees の家へよく訪れている。ステュアートはフランスに

亡命中だが、ステュアートの妹アグネスが家族と共に住んでいた。

第6節 1763年、ヒューム52歳、ステュアート50歳

17年間の空白を経て1762年末、ステュアートはイングランドに戻る。スコットランドには翌年7月末か8月初旬につく。他方ヒュームは8月10日にエジンバラを発ってフランスに赴く。次節で見るとつながりからも、この機会にヒュームとステュアート達が会ったと推定するのは自然である。しかし会ったとしてもそれは密やかに、であっただろう。この時ステュアートはイギリス国法に庇護されていなかった。国を二分し幾多の家を零落させ跡取りを死なせることになったジャコバイトの乱。その主要人物の一人であるステュアートに危害を加えるという情報をステュアート一族が掴み、ステュアートは身を隠さねばならない状況にあったからである。

第7節 1764年、ヒューム53歳、ステュアート51歳

パリに着いたヒュームは様々にステュアートの家族の面倒を見る。1764年10月にはパリにやってきたステュアートの息子 Jamy を受け入れて、大使であるハートフォード伯 (Jamy の上官の兄にあたる) に紹介する。1765年にはステュアートの妹エリザベスの依頼の手紙に対応し、1766年にロンドンに戻ってからは兄 John Home にステュアートの妻 Fanny への返事を言づてをしている。

第8節 1766年、ヒューム55歳、ステュアート53歳

ヒュームはパリからルソーを連れて、1月13日にロンドンに着く。ステュアートはスコットランドから『経済学原理』前半の原稿を抱えて3月5日にロンドンに到着。ヒュームは2月1日から Rouet と Tronchin が泊まっている Lisle-Street の Miss Elliot の宿に移り、ステュアートも Lisle-Street に宿をとる。こうして彼らは John Stewart、G. L. Scott らと共にいくつかの懸案に取り組む月日を過ごす。ヒュームは一方でステュアートの正式な赦免に向けて努力し、他方で『原理』の原稿を出版者に持ち込む前に目を通して。出版者の Andrew Millar との交渉には主に Rouet があたったが、ヒュームと Millar の関係を考えればヒュームもなにかしらの形で関わったと考えるべきであろう。

翌1767年には、11月10日付けのステュアートからヒューム宛の手紙が残っている。内容はステュアートの赦免運動に関するものである。

第9節 1769-1776年、ヒューム58-65歳、ステュアート56-63歳

1769年8月、ヒュームはようやくエジンバラに落ち着く。スコットランドで久しぶりに一緒になった二人は、ステュアートがエジンバラに来ているときはエジンバラで、ステュアートが所領の Coltness にいるときはヒュームが Coltness に出向いて、交友を楽しむことになる。

Abby hill の Mure の家は晩年のヒュームのお気に入りの場所で、ステュアー

トもエジンバラに来ているときはそのすぐ近所に住んでいた。ヒュームの方が二つ年上だが、ステュアートはヒュームをからかって楽しむのが常であった。

夏にはしばしば、ヒュームは Mure と共に Inverary のアーガイル公爵のお城で何日か過ごし、そういう機会などにはステュアートの所領に寄って客となることもあった。

結語

以上まとめると、ヒュームはステュアートと生涯にわたって深い交流があったばかりでなく、それは家族ぐるみといってよい、非常に広く密な交流であった。ヒュームが仲間として共に生きてきた同世代の多くはステュアートの血縁者である。18 世紀のスコットランドにおける経済理論のインタラクティブな発展を論ずる際、我々はこの重要な交流関係をふまえる必要があるであろう。

このことはさらにもう一つ、大きな問題を提起している。というのも、我々がひとたびこのヒュームとステュアートとの関係を認識したうえで、再度これまでのヒューム伝並びにヒューム研究を振り返ってみるならば、ある奇妙さ、ないし異常さに気づかざるを得ない。「異常さ」とはすなわちステュアート個人の抹消、である。図に示したヒュームの間関係の多くはこれまでも充分語られてきている、しかしただ一点、ステュアート個人がまるで墨塗りされたかのように欠落した形で、である。これはどういうことなのだろうか。

これをすべて一つの要因に帰するのは誤りで、複合的な事情によると見るべきであろう。しかしそれを承知で言うならば、最大の要因は他でもない、当時の政治的党派争いの激しさにあった。そしてこのことは、ヒュームとステュアートの個人的関係という個別的な問題にとどまらず、この時期の経済学史研究にも一つの教訓を示唆しているのではないだろうか。大学の世界や文筆・学問の世界といえども、当時のイギリス社会は峻烈な党派争いに揺れ動いていた。そして敗れた党派の側に関わる資料や言説は、往々にして隠され、語られず、当時実際に持っていた影響力ほどには後代からはなかなか見えない。だから当時の時代の実相を浮かび上がらせる上では、少なくともこと 18 世紀スコットランドに関しては、党派的争いを軽視してはならない。そして表に現れている言説に覆い隠された、当時としては争うだけの勢力を持っていた言説をもまた、掘り起こし適正に位置づけていかなければならない。自明のことではあるものの、ヒュームとステュアートの関係の研究史はあらためてこのことの重要性を示しているように思われる。